

令和7年度 第2回 やさしさの連鎖会議（会議録）

日 時：令和8年3月17日（火）14:30～17:00

場 所：川崎市役所本庁舎 203会議室

出席者：田中委員、中村委員、高木委員、岡本委員、丸子委員、成澤委員、ストウ委員、今村委員、近内委員

傍聴者：なし

<会議内容>

開会 事務局より開会挨拶と流れの確認

障害の社会モデル・心のバリアフリーの理解浸透を図るため、各委員の知見を活かしたクリエイティブなアイデアを創出するという開催目的を確認した。また、各ワークに取り組む前に、これまで実施した3回分の会議内容と成果を振り返った。

アイデア出しワーク

テーマ：自分とは違うだけかと一緒にいる空間をつくるためのTipsづくり

※Tipsとは、日常や仕事で知っている便利な知識、ちょっとしたアドバイスやコツ

※Aグループ、Bグループ、Cグループの3つに分かれてワークを実施

具体的にでたアイデア

Aグループ（岡本委員、成澤委員、丸子委員）

- 障害などの見た目から先回りして判断せずに、本人と対話する

（例）視覚障害者にいきなり声かけすると驚かれると思って話しかけない

目の前にいる本人の意向よりも研修マニュアルに書いてあることに従う

- みんな違って分かち合えないという状況において、少しでも分かち会えた時に加点主義で楽になれる
- 誰かにこっそり応援されていると思うと、勇気をもって行動できる
- 好きなことよりも嫌いなことを共有すると、安心した場を作れる
- 笑いは立場の違いによるハードルを下げ、仮に高いハードルがあるならば越えるか下をくぐるかすればいい

Bグループ（今村委員、ストウ委員、高木委員）

- スポーツ観戦で盛り上がることは、年齢や性別などの属性をとられない共同体験の1つである

- 善意の先回りが方向違いの配慮になることがあるため一声かける

（例）寒い日來訪者のために部屋を暖めていたら、その人が走ってきて汗だくだった

部屋が暗いと思って明かりをつけたら、講師が集中するためにあえて暗くしていた

- 場数を増やして失敗から学ぶ
- 怒られたらどうしようと感じて先回りするとき、見つめているのは相手ではなく自分かもしれない

Cグループ（中村委員、田中委員、近内委員）

- 同じ存在だと思っから腹が立つので、互いにちがいがあことを認識しておくといい

- かかわり方はためらいながら渋々でいい：（例）リラクタントヒーロー、渋々ヒーロー

- 善意100%でやる気満々でやると相手のニーズを無視してしまう

- 障害等を理由に危ないと勝手に判断して排除されるってすごく切ない

- 予定通りに実行しようとする特定人を排除することもあるため、ときには効率性を疑ってみる
- 社会には「〇〇な人がいるんだ」ということを知ることが大事
全て理解し、全員と仲良くすることが必須ではない
- 踏み込む思いやりと踏み込まない礼儀
(例) おせっかいには思いやりがあるものの、一定の距離感がない場合がある
思いやりがやってあげる・大丈夫のようなアクセルで、礼儀は緊急停止のようなサイドブレーキ的な感覚

アイデア情報共有

再集合して各委員のアイデアを発表し、その後に感想や気づいたこと等を共有する時間を設けた。

主な発表内容（各委員の発言）

- 相手を思って行動した「先回りの気遣い」は大切だが、気遣う想像力が相手の状況や意図とすれ違うことがある（ストウ）
- 多様性を考えるとき、人は同じではなく異なるまま一緒にいるという「共異体」の考え方もある（近内）
- 障害者への対応において、当事者ごとで違うからまずは対話すべきである（成澤）
- 自分の半径3メートルにいる人を気にかけてみる（高木）
- 最初は怖くてでも少しずつ一緒にの場において仲良くなっていく（中村）
- 他者を受け入れるには、まず自分が受け入れる（丸子）
- ダイバーシティ・インクルージョンでは相手と仲良くなるよりもまず存在を知ることからでもいい（田中）
- 楽しい共同体験の経験が人をつなぎ、自分ゴト化・やさしさの連鎖の始まりにもなる（今村）
- 「こっそり応援する」仕掛けで、安心感と連帯が生まれる（岡本）

クロージング・挨拶 事務局

閉会 「自分とは違うだけれど一緒にいる空間をつくる」をテーマに各委員の立場や経験に基づいた視点が共有された。意見には相反する考え方も含まれていたが、そのような違いが議論に深みをもたらしたと思う。今回得られた多様な言葉やアイデアは行政だけでは思いつかないようなものがあり、今後、Tips集として整理・可視化することで、市民にも共有可能な知見として、日常の中に落とし込んでいただけるような形で広げていけるようにできたらいい。

以上